

今日は朝から雨がふっています。春雨です。その雨に、庭の「さくら」の花が散っていきます。この雨は、どこから来て、どこへ行くのか。空にただよう雲が、やがて雨となって落ち、その水があつまって河となり、海に注ぎます。そしてその海水が蒸発して雲となります。かくして水は、無限の過去から無限の未来に向って、雲となり、雨となり、雪となり、千変万化しつつ流れています。有名な日本画家の横山大観に、「生々流転」（しようじようるてん）という大作があります、そのような水の生涯を描いたものです。

ところで、私たちの生命とは、どこから来てどこへ行くのでしょうか。人間はひとしく生まれて死んでいく存在ですが、生まれる前にどこにいて、死んだらどこに行くのか。そのことについて、あなたはどうか考えますか。仏教では、それについて、人間はどこから来てどこに行くのか、まったく分からないけれども、ただひとつ確かなことは、私は「いま」「ここ」に生きている、という事実だと教えます。そのことは一滴の雨が、どの雲から生まれ、またそれがどの河に流れていくかは、まったく分からないけれども、「いま」「この」一滴の雨の中に、その無限の過去と無限の未来が、すべて宿っているようなものだということです。

私たちの生命もまた、やがては死んでいく生命ですが、それはちょうど一滴の雨に無限の過去と未来がおさまっているように、私の生命もまた、無限の過去と無限の未来を包んでいます。「いま」「ここ」に存在しているのです。そして親鸞さまの教えによりますと、その生命の中には、無限の過去から積みかさねてきた罪深い真黒い心、美しく輝く真白い心が、交差して宿っているといえます。それは雨というものが、恐ろしい暴風雨となつて、山の土砂を流し、多くの家を倒壊させることがあり、またやさしい慈雨として、美しい花や、さまざまな豊作物を育ててくれるようなものでしょう。

それと同じように、私生命の中にもまた、恐ろしい地獄の鬼の生命と、美しい仏の生命とが、まっさらな心で宿っています。世の人々の中に、親を殺し子を殺すような鬼の心を宿した人もいれば、地震や津波の時に、自分を犠牲にしてまで、他人の生命を守った、美しい心の人がいるのは、まさしくそのことを物語っているわけでしょう。

安楽寺寺報

# 聞光

第67号  
第降誕会号  
2013/5/21

発行所  
〒737-0054  
呉市上山田町2-28  
安楽寺  
TEL0823-21-7561

親鸞さまの教え、真宗とは、そういう私の生命の中に宿る、鬼の生命と仏の生命について、深く思いあたり、「めざめ」（信心）で、その鬼の生命を厳しく制御しつつ、仏の生命をいつそう育てていくことを教えます。『阿弥陀経』に、「もろもろの上善の人は、ともに一處会う」（信心に生きる人は、死んでもまた会うことができる）と説くのは、そういう仏の生命にめざめ、それをよく育てた信心の人についていうわけです。もしもその仏の生命にめざめることもなく、鬼の生命を宿したままの人は、死んだら地獄におちていくほかはありません。



絹本墨画生々流転図より (横山大観筆)

**第5回夏の集い**  
今年の夏の集いはコールスガンティという混声合唱団が来てくれます。崇徳高校のグリーンクラブのOBや他大学の合唱団のOBが集まって組織している団体で、色々な所に出向して、仏教讃歌や懐かしい童謡などの歌声を届ける活動をしています。是非皆様もご参集下さり、清らかな歌声に耳を傾けてみてください。

その後は例年通り、ビアガーデンを開催いたしますので、耳の後は喉を潤してください。続いて楽しい時間を過ごしたいと思います。準備の都合がありますので、7月26日までにご希望の方はお知らせください。例年通りお盆合同仏参の返信ハガキに出欠の記入ができるようにしておきますので、ご門徒の方はそちらでお申し込みいただいても結構です。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

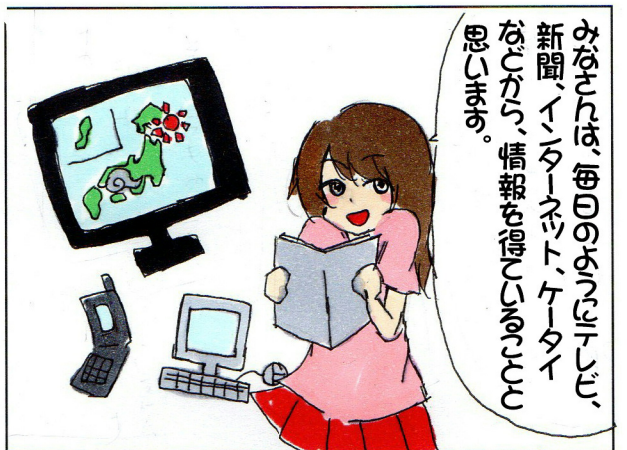
記

- 1日 時 8月2日(金) 18:00~21:00
- 2会場 ひかり幼稚園 2階ひかりホール
- 3参加費 男性1500円 女性1000円
- 4申込〆切 7月26日(金)

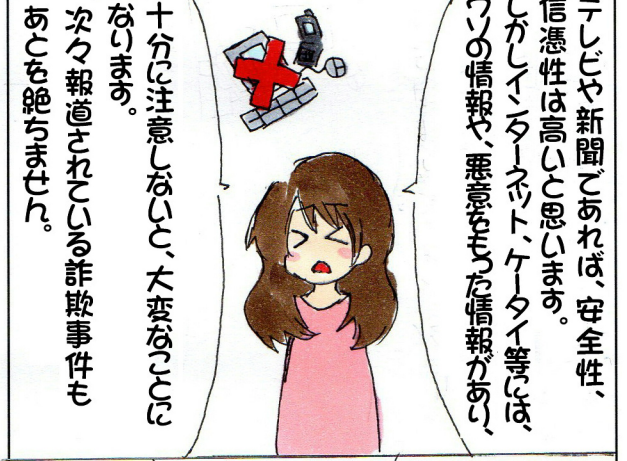
安楽寺法要案内	
六月	永代経 日時 6月15日(土)・16日(日) 両日とも朝席・昼席 講師 大阪 西光寺 天岸浄圓師 講題 「往生ということ」
七月	安居会 日時 7月13日(土) 朝・昼 講師 住職自勤 講題 「凡夫」一不都合な真実一
八月	歡喜会 日時 8月13日(火)・14日(水) 両日とも朝のみ(10:00~) 講師 信楽峻磨前住職 講題 「先祖の日に思う」
九月	彼岸会 前々住職 西王地唯信二十五回忌 前々坊守 柳父サハノ二十五回忌 前坊守 信楽美代子 三回忌 日時 9月15日(日)朝席・昼席 講師 大阪 如来寺 釋徹宗師 講題 老病死と向き合う

## 安楽寺マンガ通信

その20 信楽めくひ作



みなさん、毎日の生活の中で、新聞、インターネット、ケータイなどから、情報を得ています。私たちが身の回りにある情報の大半は、科学的な知識や欲求を満たすための情報です。しかし、全体的にその情報を信じて大丈夫なのだろうか？



テレビや新聞であれば、安全性、信頼性は高いと思います。しかし、インターネット、ケータイ等では、この情報や、悪意をもった情報がある。十分に注意しないと、大変なことになる。次々報道されている詐欺事件もあつちを絶たせられた。

情報化社会といわれる現代、情報の真偽危険性を見極めるのが必要です。私は総合情報学部でこの所を勉強しています。情報化社会を安全に生き抜く方法や、お役に立ちたいと思っています。



聞患

無知の苦しみ  
信楽晃仁

先日のどの調子が悪くなり、耳鼻咽喉科を受診しました。忙しい日が続いたこともあり、色々な事が重なって、一番弱いのだに出たのだと思います。その耳鼻咽喉科は以前ポリプの手術をしたときの主治医で、その後もずっと見てもらっていたのですが、良くなって少しご無沙汰してました。久しぶりに行ってカメラで見てもらうと、声帯に小さな赤い筋が入っている。血豆のような、傷のようなものでした。ポリプがまたできたのかと思っただけですが、ホッとした。先生はこの傷のようなものが声の出ない原因だろうと言われます。声帯は微妙な所なので、ちょっとしたことが、影響するようです。先生はできれば声を出さない方が良くと言われます。他宗であれば声を出さずとも座禅を組むなり、修行をするなりと何らかやりようがありそうですが、浄土真宗の僧侶は声が出せないとお経も読



めず、法話もできません。仕事ができないことに気づきました。前住職のように本がかけるようなら良いのですが、そういう頭はないので、私は人一倍声を大事にしないといけないことに気がつきました。今後、お参りの声が少し小さくなるかも知れませんが、ご了承ください。さて、その時です。私が診察を終えて、看護婦さんの指示に従って吸入をしていると、私の後に入ってきたのが二・三歳の男の子でした。診察室に入り、先生にみてもらうことになったとたん、大声で泣き始めました。それが大きな声で、「いやだ〜」「かえる〜」と大騒ぎです。どんな辛い診察かと思えば、「口開けて」と先生の声が聞こえてきます。みんなと同じ定番の、鼻を吸い取り、のどをみたぐらいの様子でした。すぐに診察は終わり、看護婦に抱かれて私の横に来た男の子は、さっきの大騒ぎは嘘のように、右手にシールをもらって喜んでいいます。さっきの大騒ぎは何だったんだと言うことです。この男の子は何故これほどまでに苦

しまなければならなかったのかという、その苦しみの原因は無知だと思うのです。知恵がないから不安と恐れ、そしてわがままな人を信じることができない。わがままとは自分の思うことしか信じられないという事です。先生に任せることもできず、敵(かたき)のようにしか思えない。「ガキ」という言葉があります。時々子どもをしかる大人に「このくそガキ」という言葉を耳にします。このガキとは仏教でいう餓鬼という鬼の事です。その餓鬼の特性は「自分の思うようにならないと気がすまない」という恐ろしい鬼です。この子どもは無知による不安と恐怖。そして餓鬼の性質を本性とし、自分の思い通りにならない事が許せないのです。それがだだこねたり、泣くぐらいですんでいるうちにはいいのですが、これが腕力を持つたり、ガキのまんまで変な知恵をつけると手に負えません。ちまたには



大きく育ったガキがたくさんおり、毎日窃盗や殺人やと事件を起こしています。大人は耳鼻科に行って同じ事をされても、恐れることはありません。経験があります。今私のこの辛い風邪の症状は、この病院の先生にみてもらえば治せるんだ。安心して口を開けてのどをみてもらい、先生を信頼し、指示に従って、自分の病気を治すことがよりよい選択である事を知っています。同じことをされるのに片や死ぬほどの声を張り上げて大泣きをし、苦しまなければならぬ子どもと、安心して信頼し任せきることのできる大人。その違いは無知と煩惱が苦しみの種になっているのではないかと思うのです。この子どもと大人の違いが、そのまま私と仏さまの違いです。今私たちは耳鼻科では苦しみますにすぎないけれども、これから私たちの無知と煩惱は、必ず苦しみの種となります。恐れることなく、安心して私に任せろ、とおっしゃっているにもかかわらず、その声に耳を貸さず、わ

聞光

友の会休止について

この度、平成十九年七月から始まった友の会(元ミドルエイジクラブ)も第六十回を迎えました。毎月一回夜の大人の集いとして開催してきましたが、最初は毎回十名ほどが集まって開催していましたが、だんだんと参加者が減り、近頃は常時四〜五名という参加者になっていました。その参加者の中にも、色々とお気遣いをいただきながらがんばって参加してくださった方もあり、どうにも夜出るのは少し厳しくなってきたという声もあります。このままで続ける



いことを私は帰るのだといます。私たちは永遠の別れだと思えないことを、俱会一処と一つとところで会えるといひます。厳しい現実に出会い泣き叫ぶ私たちを、私は大人が子どもを見るように、知恵なき者よ。哀れな者よ。どうか真の智慧をもった人仏(人物)に成長するよと、人が仏の智慧を持つことのできるお念仏を伝えてくださつたのだと思ひます。事は困難であり、一度見直しが必要になりました。友の会から始まった夏の集いは今回五回目となりますが、年に一回の夏の集いは続けていくこととし、毎月の友の会を休止する事といたしました。またいつか皆様の要望にあった形で再開できればと思ひます。六年間、陰になり日向になつて、友の会を支えてくださった皆様、厚く御礼を申し上げます。また今後とも宜しくお願ひ申し上げます。本当にありがとうございます。

仏事のイロハ

お勤めの作法②

勤行の作法



前回、お勤めの作法やお勤めの意味についてお話ししましたが、今回は、日常の勤行と、その作法について述べてみたいと思ひます。是非ともお勤めできるようになつていただきたいのは、「正信偈(しょうしんげ)六首引」です。毎日のお勤めでは「草譜」という節で上げ、ご命日などの法要では「行譜」で上げるのが一般的です。「正信偈」は、蓮如上人の頃(十五世紀)から、先祖の方々が読み親しんでこられたお経(聖典)であり、真宗門徒の必須のお経と言えましょう。このほか、時に応じて「仏説阿彌陀經」「讚仏偈」「重誓偈」「十二礼」など、『浄土真宗聖典』や『門徒勤行集』に載っているお経も上げてくださう。ただ、「般若心経」やご詠歌はお勤めしません。それは、浄土真宗の勤行が、仏徳讃嘆であり、阿彌陀如来の御本願のおかげで救われていく事を慶んでお勤めするからです。自力修行を前提とした「般若心経」などは、その点、そぐわないわけです。勤行の作法は、①念珠を両手に掛け、お念仏しながら合掌礼拝する。②経卓や膝に置いてある聖典を両手でとっておいたいただき、開ける③右手でリン棒を持ち、おりんを二つ打つ④勤行中は聖典を胸の前に両手で持つ⑤お勤めの最後は、通常おりんを三つ打つ⑥聖典を閉じて両手で抱いたいただき、元の場所に置く⑦お念仏しながら合掌礼拝する。以上の要領です。

台掌